くノ一 Vs エイリアン
淫欲忍法帖
小説 夜士郎
挿絵 牡丹
立ち読み版

序章 006
第一章 虐者襲来の巻 011
第二章 幼肉虐戯の巻 056
第三章 腐肉布団の巻 084
第四章 父娘淫辱の巻 119
第五章 双肉被虐の巻 141
第六章 託卵淫獄の巻 183
第七章 邪悪難産の巻 208
終章 247

# 登場人物紹介

Characters

## 雪花（せっか）

綾のボディガードを務めるくノー。高い身体能力と綾への忠誠心をもって、突然襲ってきたエイリアンから綾を守る。

## 遠髪綾（とおがみあや）

日本に名だたる大財閥、遠髪家の令嬢。初等部五年生。護衛である雪花のことを姉のように慕っている。

艶めく唇からほうと安堵の息を吐く。あとは、自分がどうするかだ。
クラゲといえばタフなもので、すでに起きあがって、こちらに向かっている。白濁液は手足にべっとりと張り付いていて、全く剥がせそうにない。
まさしく手も足も出ないというやつだ。
間近で見るクラゲの姿は、一層に不気味であった。全身を覆うヌメヌメとした肉肌は、弛んで皺が寄っている。赤黒い染みがいくつもあるのは老人の肌を思わせて、人のそれに似ているだけになおさら気味が悪い。
クラゲの下肢は何十本もの、ピンク色をした腸のような触手である。一本一本が雪花の腕くらいに太く、ぬらぬらとした粘液にまみれている。先の方は亀の頭のように膨らんでいて、その尖端には切れ込みのような筋が入っていた。
「うっ……ううっ……」
白濁液によって固められた手に、脚に、触手が伸びてくる。鎖帷子越しの触手は、生暖かくぬるぬるとしていて、その感触にぞわりと怖気が襲いかかる。
腕によちよちとよじ登って絡みつき、手入れの行き届いた脇の下までぬちゃりと濡らした。すらりと伸びた美脚をなめ回すように、ぐるぐるとはい上がってくる。
（む……固まっているのが、溶けていく……）
触手の表面を覆う粘液は、自身の吐き出した接着剤を溶かすようだ。だが、四肢は粘液にかわって触手に拘束されてしまう。四方にぐっと引っ張られ、手足が大の字を描く。

「ああっ……くっ、こんな、格好っ……！」
真っ昼間の校庭で、立ったまま、美身を大きく広げられている。その恥辱に殺気を籠めて睨みつけても、化け物は何の反応もしない。
知能があるのかないのか、それすらもわからない。
顔の前に何本もの触手が浮いている。雪花の顔や首筋、胸元をツンツンとつついて、捕らえた獲物の反応を窺っているようだ。とりわけ柔らかな乳肉に興味を示したのか、ぐんと突き出す胸山になんども触手を擦りつけてくる。
豊満に育ったマシュマロが、むにゅりと形を歪められた。
「ふぁんっ……！　ん、くっ！」
柔肌を触手と帷子がくすぐって、思わず妙な声が出てしまい、雪花の頬が朱に染まる。
と。触手の尖端に入った切れ込みが、くぱりと開いた。そこに現れたのは真っ赤な口腔と、あらゆるものを貪り尽くすかのような、無数の牙であった。
「な、なんだっ……！」
脳裏に浮かぶのは、脳を喰われた男子生徒の骸だ。まさか、あのように喰われてしまうのか。腹の底が冷えるような恐怖が、襲いかかってくる。だが。
「なっ、ちょっ、何をしているっ⁉」
その口は、対刃繊維で織られた着物の合わせを左右に掻き分けて、ＮＡＳＡ特製衝撃吸収綱で構成された鎖帷子をたやすく噛みちぎっていく。柔らかな膨らみを押し潰す肉触手

に乳房がたわみ、歪む。桃色の肉突起がチラリ、チラリと、着物の間から見え隠れする。
「やっ……やめろぉっ！」
腰をくねらせ触手から逃げようと身を捩る雪花の乳肉がぶるりんっと揺れに揺れた。だが、帷子は全てを裂かれる前に、内部の圧力に耐えきれずばちんと弾けた。とたんに。
ぶるんっ！　ぶるるるんっ！　と。
「あああっ……う、ううっ！」
勢い跳ね上がった肉玉に、雪花は恥ずかしそうに顔を逸らせる。
こんな、学園の校庭で。このような化け物に、いいようにされているのが悔しかった。
上下左右に跳ね回り、露わとなった果実は、あまりにも肉感的だ。
重そうで、柔らかそうで、眩いばかりに真っ白な肉玉が二つ並んでいる。一玉が、男が両手で抱えても余るだろう肉の量を誇っている。鍛えられた大胸筋により、それほどの大きさを有していてもなお垂れることはなく、乳首の位置は驚くほどの高みにあった。
乳房の大きさと比べれば、慎ましやかともいえる苺の実である。色もまた、色素の薄いピンク色で、ド迫力の豊満肉を上品に彩っている。
玉の表面はしっとりとした汗に濡れ、ボディソープの、甘い芳香を漂わせていた。
その目前に迫る、触手が二つ。その口から突き出した細く長い管を見て、雪花は顔を強ばらせた。管の尖端は斜めにカットされていて、それは注射針に似ていた。
「……っっ！　くっ、ああっ！　な、なにをっ……！」

注射針の尖端は、雪花の乳頭サクランボに狙いを定める。
針の先が可憐な乳首に触れる。びくん、とくノ一少女の肢体が震えた。
そして、ずぶ、ずぶと。
「くぁああ……ああっ！　むねに、むねにっ……刺さ……って、くるっ……！」
乙女の果実に潜り込んでいく、その針の感触に、背骨をぞわぞわとした寒気が撫でていく。肉を貫かれるという、肉体損傷の恐怖に、肛門がきゅっと締まりあがる。――と。
「あ、あああああっ？　な、何か、入るっ！　おっぱいに、入ってっ……！」
乳肉の内部にびゅうびゅうと、熱い何かが注ぎ込まれていく。
乳神経に拡散していくその正体不明の感覚に、ふるんふるるんと乳房を波打たせ悶える雪花。そのマシュマロ肉内部に、クラゲの何かが、たっぷりと注ぎ込まれていく。
「むねっ……むね、破裂するっ……！　な、なにをっ……入れてるんだぁあっ！」
化け物に返答などあるはずもなく、だが問いかけずにはいられなかった。
ただでさえ大きな乳房が一回りも膨らんだ気がする。たっぷりと何かを詰め込まれて、ようやく管針が引き抜かれる時には、雪花の身体は汗まみれであった。
（な……なんだ。私は一体……何を、された……）
乳房の表面がひりひりとして、全体が熱を帯びている。空気の流れが感じられるくらいに敏感だ。その敏感乳に触手が伸びる。ぐるりぐるりと巻き付いて、見事に実った果実をもぎ取ろうとでもいうように、ぐぃいと引っ張ってきた。

（くっ……！）
襲いかかって来るだろう、乳房を締め付けられる苦痛の予感に身を固める。だが。
「んんっ⁉　ふぁああぁっ！」
背中がきゅぅと弓なりに反る。雪花の眉根が、皺を寄せた。
痛くなど、なかった。いや、それよりも——
（なんだ、いまのっ……いまの感じは……）
乳房に巻き付く触手の感触が、なんだか甘い。ぬるぬると濡れたその肉が、乳肌の表面を擦りあげると、ぞわぞわとした感覚が背筋を撫でていく。するとぷくぅ、と、乳首が硬く尖っていって、その反応が恥ずかしく、雪花は睫を震わせた。
（敏感に……なっているっ。なんだ、これっ……）
触手にまとわり付く粘液が、柔肉を穢していく。ぬめくる触手が滑り、擦れ、そのたびに乳の中に甘い波が響き渡って、雪花はふるりふるりと身を震わせた。
「あ、あ……あつ……い、な、なんだこれはぁっ……。くっ⁉　ん、ああンッ！」
熱い、熱い、熱い。おっぱいが、熱くて熱くてたまらない。
触手が熱い。粘液が、熱い。玉肉に、熱い餡をかけられているようだ。
忍びとしての克己心が、その感覚に溶けていきそうだ。弾力に満ちた触手の感触が柔肌をこするたび、膝の震えるような気持ちよさが下腹まで波及する。
ぬるり、と、何かがが鎌首をもたげてくる。もっと触って欲しいと、もっと強く、揉ん

でほしい――などという、信じられない思考が。
（だめだっ……！　いけない、この感覚はっ……いけないっ！）
「こっ、このぉ……化け物ォオっ！」
その不惑を押し潰すように、吠える。瞳を尖らせ、意志を燃やし、クラゲに向かい気勢を叩きつける。だが、触手が口を開き、乳肉にかぷりかぷりと噛みつかれるや。
「んくっ⁉　ふぁぁあぁんっ……」
黒艶ニーソに覆われた美脚がかくりと崩れて、腰砕けになってしまうのだ。
ヒップがヒクッと跳ね、下腹部をくすぐる快美に唇が上向いた。鍛え上げたくノ一の、張りつめた生肌は桃色に染まっていく。その頬もまた、赤く、赤く。
「ハフゥン……そこぉっ……くっ！　だ、だめだっ……！」
吐き出す息は砂糖のように甘く、瞳はとろりと潤んでいく。
ああ、と思う。女生徒たちが化け物に犯され喜んでいたのは、これが原因なのかと。
明らかに、身体がおかしくなっている。乳房に注がれた何かに、媚薬のような効能があるのだろう。他の化け物も、似たようなものを出すのかもしれない。
（それにしても、こんなっ……！　おっぱい、ばかりっ……！）
乳肌の感覚は、ヌメる触手に這われるたびにいっそう鋭敏になっていく。朱色の衣装は汗に濡れなお色を濃くして、少女が身を捩るごとに着崩れていく。解れた髪が頬に張り付き、唇は水気を帯びて淫らに艶めく。成熟した肉体を震わせてくノ一少女は煩悶する。

「感じるっ……感じすぎっ……は、はひっ……むねえ、おかしく……んくぅぅ！」
乳房に螺旋を描き巻きつかれた。歪められる乳房の形はまるで巻き貝。尖端に、血がぎゅうっと集められて、乳首がまるで血玉のようにぷくりと膨らんでいく。
（こんな……こんなに、私の乳首……かたく、なって……）
ひく、ひく、熟した尻の脂肉がひくつく。ビンビンに尖った乳頭が、ピンク色から色濃い朱へと変色していく。かぱりと。開いた触手の口が、その真っ赤な内部に刺激的なトゲトゲを内包した口腔が、震える桃色乳頭に狙いを定めていた。
「あ……ああ、あ……」
胸中によぎる、畏れと期待。妖しく光る雪花の瞳。
（抑えろっ……こんな心の惑いなどっ……！）
強く心で念じ続けても、唇から滲み出す涎は、忍びたる彼女の奥底に眠る願望を表しているかのようだ。じゅわりと濡れる瞳に――突起に食らいつく触手が映った。
敏感さを増していく授乳器官に、突き刺さる牙は脳髄を焦がすほど鮮烈だった。
「くひぃいっ！　ひぃいいんっ！」
乳神経をびりびりと駆け抜ける電流に、天を向き晒した喉から裂くような声があがる。
「かっ…はっ！　こ、こんなっ……！　キクなんてっ！　あ、ええっ⁉　ひぃいいい！」
触手口が口先をもごもごと蠢かせる。コリコリ。コリコリコリ。
「そっ、そこォ！　おっぱいのさきっぽっ！　か、かむにゃぁあっ！」

弾力に富んだ肉の粒が噛みしだかれ、こねくられる。コリコリコリコリと。
「はひっ！　くひっ！　き、キキすぎるっ……！　こんなの、あはぁあんっ！」
媚体液による快感の増幅はあまりに強烈だ。突起に突き刺さる牙の、一本一本までわかってしまいそうな鋭敏な感覚に、頭の中がぱちぱちとしてくる。黒布に艶めかしく彩られた媚脚に、肉の筋がぐっぐっと浮かんで、緋色の脚甲が悶え揺れる。
瞳には涙。きりりと結んだ口の端からは、涎が垂れて落ちている。
（く……るっ、くる、きちゃうっ……！　このままでは、イかされてしまうっ……！）
自らを慰めて、女の快楽を味わったことはある。だが、いま襲い来るこれは、指での弄くりなど子供の戯れにもならないくらいに強烈だった。
唇を噛み締めて、漏れ出す声を堰き止めようとする――けれど。
「あっ、ああっ！　おっぱいぃいっ……っ！　だめ、だめなのにぃぃ！　ああっ！」
触手の牙が芯肉をなぶると。脳を揺さぶる芳醇な悦楽にとろける声を晒してしまう。首が、耳が震えて、くびれた腰がくねくねとダンスを踊る。
（いやらしい……なんていやらしいんだ、私の……むねはぁ……）
汗まみれでテカテカ輝く張りに張ったゴム風船。それを好き勝手に弄ばれて、たまらない快美を感じる自分が屈辱だった。口惜しくて、情けなくて。
けれど腰の芯までとろけさせる熱い衝動を抑えきれない。
「いっ……イクぅう……ああ、あああっ！」

押し寄せてくる、波のようなもの。甘ったるい汗に濡れきった全身がびくびくと震える。
そんな堪えきれない快美感に身体が襲われているのに。
触手の口がぐちりと、強く強く果実の実を噛み潰したのだ。
「ひぎっ――――っ！」
肉を潰される苦悶は快楽にとってかわり、びりびりびりっ！　と乳神経に快感パルスが駆け抜ける。肉房の内部が熱く掻き回され、乳房の表面にぶわりと汗が噴き出す。
「んぁああっ、おっ、おっぱいでっ……い、イッ……クっ――――――――っ！」
背中がきゅうっと弓なりに反りあがる。勢いで触手が胸から放れる。
眉間にぐっと皺が寄る。襲い来る官能の波は、乳肌を焦がして乳頭まで到達した。
一度で終わらない。大きな波に続いて、小さな波がなんども彼女をさらっていく。
「おっぱひぃぃ！　イク、っ、んんっ！　イッ、いっ、ひぃぃぃぃっ！」
小刻みに震える身体、脂肪の塊である乳尻にぶるぶると漣（さざなみ）が広がっていく。
そして――びゅるぅうううっ！　びゅっ！　びゅびゅ！　びゅぅうううう！
「んはひぃぃぃっっ⁉　なんだ、なんだこれぇえっ⁉」
乳突起の尖端から白色の液体が弧を描いて噴出したのだ。ガクガクと乳肉絶頂に膝を震わせる雪花の脚甲にびちゃびちゃと、飛び出した白汁がぶちまけられる。
「こ、これは……乳っ……⁉　ひぁああっ、し、搾るなぁあっ！」
乳房に巻き付く触手がぎゅるりと食い込み、巻き貝のようであった柔乳が歪な形にくび

りあげられる。上向いた乳頭からどっぴゅどっぴゅと白汁が噴出して、雪花の美貌に降り注いだ。前髪から鼻筋を流れて落ちる母乳の甘ったるい匂いに頭がくらりとする。
「こんな、こんなっ……お、お乳っ……な、んふぅうう〜〜〜ンッ！」
我慢していた小水をようやく放出した時のそれを、何倍にもしたような気持ちよさ。
くぱりと拡がる乳孔を白濁ミルクが通過してゆくたびに雪花に襲い来るのはその感覚であった。母乳が、乳管を流れるのが気持ちいいのだ。ドクッドクッと、先っぽから噴き出すたびに、魂まで引き抜かれるような快美に襲われるのだ。
「はっ、はぁあっ〜〜〜っっ！　なんだ、なんだこれっ……おっぱいからお乳が出るのがっ……きもちぃいっ……！　あ、ああっ！　また出るぅうぅう〜〜〜〜っっ！」
びゅばっびゅばっ！　どぴゅどぴゅどっぴゅ！
（気持ちいい、気持ちいいっ！　おっぱいでるのっ、きもちぃいいっ！）
「あ、ぁああンっ……むねぇっ、出さないでっ！　また、またイクぅ……っ！」
上向きに搾り上げられる淫乳からミルクが噴き出すたびに下腹に駆け抜ける、射乳の悦楽。肛門がきゅっきゅと収斂し、駆け抜ける絶頂感にむっちりヒップが波打った。
「ふぁ……あ、はひぃんっ……きもち、よすぎるぅ……おっぱいでるのぉ……」
アクメの波にさらわれて、腰ががくりと落ちた。はぁ、はぁと、荒い息を吐く雪花の顔は、酩酊したように緩みきっていた。
「なんなんだっ、おまえらはっ……！　一体何が目的で、こんなっ……！」

顔中を、自分の放出したお乳で濡らして雪花は叫ぶ。だが――また別の触手の二本が、きれあがった股肉に伸びていくのを見て、さしもの雪花も顔を固めた。
汗にぬめり黒艶輝くニーソックスの真上には、見えるか見えないか、ギリギリのラインもイヤらしいミニスカ着物の裾がある。触手はそれを、ひらりと持ち上げた。
「ああっ……」
いいようにされていることが情けなくて、たまらずに、その行為から顔を背けてしまう。
露わとなったのは、古風な衣装に似合わない可愛らしい下着だ。
おへその下にちょこんと添えられたリボンがポイントな、ホワイトとピンクの組み合わせも甘いキャンディカラーのパンティである。見えないところがおしゃれのポイントなどと考えて穿いていたそれを、校庭のど真ん中でさらけ出されてしまった。
上質の生地は光沢感も優しげで、その股間から滲み出した恥ずかしい汁をじゅっぷりと吸い込んでいる。まるでお漏らしをしたみたいに、濃い濡れ染みが股間を中心に拡がっていた。そんな自分の反応が、たまらなく恥ずかしく、顔面が燃えるように熱くなる。
「くっ……！　このっ！　はなっ……せぇっ！」
藍髪を揺らし、桃尻を振って身悶える。だがそんなささやかな抵抗も空しく、触手どもは股ぐらの、帷子とショーツまでをまとめて食いちぎってしまう。
――お日様に照らされて、少女の秘肉はてらてらと濡れ輝いていた。
「……うっ、くっ！　くそぉっ……っ！」

処女膜を、破られた――ついには実父に純潔を奪われてしまったその事実が、綾の心を闇色の絶望に染め上げていく。呆然と見上げる瞳から、涙がはらはら流れ出す。

哀しみに壊れていく愛娘の内部を、父親は容赦なくほじくっていく。

「ひ……ひひぃ……こ、これが綾のなかっ……キツキツでぇっ！　ひひ、ペニスが潰れそうだよぉ。気持ちいいぞぉ、あやぁっ！」

子供そのもののヴァギナは内側に押し込まれ、父親の肉棒を圧迫している。鉄杭のような硬さに膣粘膜が擦られて、怯える子宮口からはどぷどぷと、潤滑のための愛液が大量に分泌され続けている。

――その子宮唇にぐちゅりと亀頭口がキスをした。

「んぐぁああっ！　ふかいっ……よぉっ……奥すぎるよぉっ！　ん、んぁああ……」

びくん――紺色の布地に包まれた、可憐な肉体が打ち震える。父親は、女の子の一番大事なところになんどもなんども口づけを繰り返して、喜悦を浮かべていた。

「ひっ……ひひゃっ！　あやのなか……はんぶんも、はいらんなぁ……ふぉぉ！」

「んぐぅ～～っ、ひゅっ、ん、ぎっ……いぐひっ……！」

荒ぐ呼気、横隔膜がぐうっと浮き出す薄いお腹に、中年男の涎がぽたぽた落ちる。

ぐちゅ！　ぐちゅ！　にちゃりっ、ぐちゃりっ！

「あ……ふぁあっ……いやっ、やめてぇ……やめておとうさまぁ……」

ゆるゆると父が腰を動かす。肉杭に貫かれた下腹がそれに引かれて揺れ動く。実父の肉

にヴァギナを抉られている感触は、あまりにもおぞましく、一つ、赤ちゃんの門に口づけをされるたびに、大事なものが喪われていく気がした。
父と、母と、私と――いままでの、絆のようなものが。
無惨なまでにカタチを変えられた、ペニスを呑み込むヴァギナがひりつく。
ミミズによってもたらされた早すぎる快楽の記憶が、綾の身体を熱くさせる。
「あ、あああ……お父様、おとうさま……んっ、んんっ！　ふぁ、あ、あ……」
ぐちゅぐちゅとかき回される蜜壺。どくん、どくんと疼いてくる。
（おっきぃ……お父様ので、アソコが……熱い、熱いよぉ……熱くなってくるよぉ……）
嫌悪感が、気持ち悪さが、だんだんと薄れていく。赤子のような肌は徐々にピンク色に染まっていって、吐息は熱く、上下する肋骨とともに弾んでいく。
「だめぇ……だめなのぉ、お父様……！　親子でこんなの、だめなのぉ……」
ぬかるみ、とろける肉の壺。きゅうきゅうと男根を締め付けて、物欲しげに涎を垂らす。
それが実の娘のヴァギナであることに、「実の父親」は気づいているのか。
「おぅうっ、おうおうっ！　綾の、なか、いいなぁ……ひきぎっ！」
彼は身体を起こすと、あぐらをかいて綾の身体をぐぅっと起こした。
ずぶんっ！
「んぐぉおぉっ！　お、お父様のっ……おちんちんっ、さ、ささるぅぅっ！」
体重がぐっと結合部に集中した。ただでさえ、半分しか刺さっていない肉棒がそれだけ

を支えに綾の身体を押し上げたのだ。お腹の奥で、何かがぐちゅりと潰れた――。
「くふぅううんんっ！　し、しきゅうぅう、つ、つぶれっ！　はにゅっ」
保健体育の時間に習った、赤ちゃんのできるところ。小さな小さなその袋が肉凶器で突き上げられて、綾の背中がぐうっと反り上がった。
父親の手が綾の脇腹を握る。両手の指がくっつきそうなくらい、細い胴体だ。そして、
「ひっ、ひぃんっ！　やへぇえぇっ、おどぉざまぁあっっ！」
ぐりぐりっ！　ぐりぐりぐりぐりっ！　ぐりゅりっ！
「らっ、らへぇっ！　しきゅう、しきゅうつぶさないでぇっ！　はひぃいっ」
その体勢のまま胎内をかき回された。
ぬちゃぬちゃ、ぐちゃぐちゃ、結合部から粘ついた音が流れ出す。肉棒の三分の一ほどは綾の尻から露出していて、その肉柱に伝い落ちる蜜液には赤い滴が混じっていた。
「んぐぅうぅ！　ああんっ、ああ、もう、やめてぇ……お父様、おねがいぃぃ……っ」
あどけない顔は桃色に染まり、閉じきれない唇からは涎が垂れている。腰を一つ突き上げられるたびに、背骨の中をゾクンと白い電流が駆け抜けた。
（なんで……どうして、わたしは、こんな、にぃ……）
破瓜の衝撃はいまだ幼い体躯を責め苛んでいる。痛い。すごく痛い。アソコも――心も。実の父親に処女を奪われた、その事実に頭がどうにかなりそうだ。
けれど、それが、それこそが。

なんどもなんどもぐちょぐちょに、かき回されるオマンコ。そこから出てくるキモチイイのが、親とセックスをしていると、そう考えるだけでもっとすごくなるのだ。

「おねがいっ、おねがいお父様っ……ふぁあっ、んぁああっ！　だめなの、綾、だめなのっ！　おかひくなるっ、おかひくなっちゃうのっ！　アソコ、おかひくなるからぁっ！」

尻を二つに割るような拡充感、幼い膣粘膜をズリズリと往復する父のペニス。濡れ濡れの生殖器はだんだんとほぐれていき、娘の肉道は父親のそれを受け入れていく。

（あ……赤ちゃんのあな……お父様のカタチになっちゃった……）

ぞわぞわぞわっ、と背筋を駆け上がる、禁忌の快楽。ドーナツ子宮をぐちぐちと肉槍で貫かれ、小ぶりな尻がプリっと震える。幼い腰が左右にくねり、肉柱がこねくられる。恥骨の奥からジンジンとくる疼きに、露出する乳首を父親の胸板に擦りつけてしまう。

娘が、父親に抱き付いて、甘えているみたいに。

「おぉっ、うぉぉつ！　あ、あやっ、あやっ、あややあやあややあややっっ！」

ぎゅうっと背中を抱きしめられた。溶け合うように密着する父娘の身体は性行為の汗でびしょ濡れだ。綾の顔にだらだらと、父の唾液が降ってくる。額に、瞼に、小鼻に唇に、中年男の加齢臭が混じった生臭い唾液が塗りたくられて。

その匂いすら、愛おしい。

「んんっ、んんんっ！　ア、アソコぉお……おっ！　きもひいいよぉっ！　おひっこのあなきもひぃいっ……だめっ、お父様の、おちんちんなのにぃっ……！」

全身に膨れあがる、快美の熱に腰が震えた。思い出す。母親の狂態を。実の娘を真上にただただ快感に翻弄されていた母親の姿を。

――そうか。ああなってもいいんだ。

心の片隅にそんな思いが浮かんだ瞬間であった。小突かれ続けた子宮が、まるで受け入れるかのようにその入り口をぐぱりと開げて。

ずぶりぃいいいいっ！

「ふぁああああんっ！　おなかっ……おとうさまでいっぱいにィっ……！」

背中が折れそうなほど反り上がった。破れかけていたスクール水着からぶちぶちと繊維の裂ける音がした。ドーナツ状の子宮口に、みっちりと肉棒を埋め込まれて、腰の砕けた綾の身体がへなりと父親に縋り付く。

「熱い……ふかい、深いよぉ……ひぃんっ！　おなか、いっぱいだよぉっ……」

睫を震わせ、はらはらと涙を流し、綾は甘い呻きを漏らす。

「フヒヒ、フヒヒっ！　あやへぇえっ！　ぎぼちじぃいいいぞぉおおっ」

そんな娘の様子に父親は鼻息荒く興奮していく。抱き付いたまま練り動かされる腰の上で、綾の身体は壊れた人形のように揺さぶられる。

手が、脚が、力なく跳ね、上を向いたままの首がガクガクと振り回される。

「あはぁ……はぁっ……おとうさま、お父様……ペニス、きもちいいの、よくて、んふうっ！　もう、わけわかんなくっ……！　はっ、はぁああっ……ふぁあ……っ！」

包むように抱き込んだ、小さな身体を父親はほじくり続ける。そもそもが小さすぎるオマンコに不釣り合いな巨肉である。タテスジを構成していた唇肉は爛れ、それでもなおずりずりと擦られ続けて赤く腫れてしまう。

背骨が捻れ腰の奥が煮えたぎる。父親の胸板から汗の臭いがむわりと立ちこめて鼻孔を焦がす。どろどろに溶けていく下半身が、父の股間と混じり合っていくようだ。

手足指の先まで快感に染まっていく。ぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃ、父ペニスで娘ヴァギナをかき回されて、脳漿が沸騰するような官能感に意識が白んでいく。

「らへっ、やへぇっ！　だめなのにっ、きもひいいのだめなのにっ……！」

びくびく、びくくっ！　可憐な手足が細かい痙攣を始める。肛門陵辱による絶頂の記憶が、少女の身体を再びのエクスタシーへと押し上げていく。ぱかりと開いた口腔に、実父の涎がぼとぼと落ちる。それをコクコク飲み干していく、綾の顔は陶然と綻んでいた。

「んぐぅぅつ！　ふああっ！　ごめんなさいっ。おかぁさまっ……！　ああっ、んっ！おかあさまごめんなさいっ、あや、あやぁっ！　お父様のおちんちんで、きもひよくなっひゃってまふぅっ！　ごめんなさいっ、きもひいいのとまらないのぉっ！」

ぐちゅぼっ！　じゅぼっ！　ぬぐんぐっ！　ぐずりっ！

子宮袋の内側を埋め尽くし撫で回し抉りあげかき混ぜられる。キュンキュンと疼きを増すオマンコに狂わされ、お尻をウネウネ揺らして綾は身悶えた。

「んぐぉっ……ぐぉぉお……あやぁあ……でるぞぉお……いっぱいい……」

うめき声が聞こえる。出る。出る？　何が。授業で習った――子供の種が？
（出されるの……？　お父様の、せ、せーえき、お腹のなかに……？）
ゾクゾクと子宮袋が震えた。それはあまりに禁忌で、背徳的な行為であった。
快楽にとろけた頭で思い出す、受精のプロセスは――。
「んっ……いい、よ……わたし」
濡れきった瞳で。
「まだ、だから……いっぱい、出しても」
告げた綾のその言葉に。
「――――――――――――――――――――あや」
父親の言葉に何か確かなものが混じった気がするがよくわからない。溶ける。キモチイイのに溶けていく。頭の中がぱちぱち言って何も考えられない。
「だっ、だめだ……ぎ、ぎぃいっ！　離れろっ……頭から、離れろおぉっ！」
何か叫んでいるでもお腹のなかでおちんちんがぐんぐん熱く太くなっていく。何かがお父様の奥からこみ上げてくるのを感じる。熱くて美味しそうな何かが。
「ふぁああっ！　ああっ……お父様、おとうさまぁああ……！」
父は泣きそうな顔をしていた。その腰がぶるぶると震え、そしてその尖端から、熱いものがどくどくと、お腹のなかに溢れ出した――。
どくんっ！　どびゅるびゅるびゅるっ！　びゅっるるるるるうっ！　びゅるう！

グッ……グッ……ズブ、……ズブゥ！

「ォ……オゴォ……グゥ、んぐぅ……んんんん～～～～～っ！」

狭隘な喉のさらに奥へ肉根を潜り込ませようと、頭蓋を押さえ込む腕になお力をこめてしまう。顎が外れそうなくらいに口腔を開かれて、あどけない顔が痛々しく歪んでいる。抵抗するように、妊娠腹に押し当てられた細い腕がぶるぶると痙攣している。

酸素を求める顔は真っ赤で、小鼻が開いたり閉じたりを繰り返していた。

「ああ……苦しいですか。おチンポで口をふさがれて、苦しいですか、お嬢様？」

これが自分の声だろうか。こんなにうっとりと、熱に浮かされたような声が。

見上げてくる綾の瞳は不安に満ちている。鼻息がふごふごと男根に吹き付けられて、背筋がぞわぞわした。両の指で包み込めそうなくらいにちっちゃな頭。呼吸困難にうねる青く幼い肢体。狭くて気持ちいいおクチ。その全てがまるで、ペニスを気持ちよくさせるために存在する自慰器具のようだと。湧き上がる獣欲が、そんなことを思っていた。

ぐりぃっ、ぐりぐりっ！　頭蓋を左右に揺さぶって、汚肉を喉奥に擦りつける。

「ぐうぅ、うぅうぅっ！　じ、じぇっがぁ……げぶぅっ！」

ずぶりずぶりと肉の根が、綾の奥へと潜り込んでいく。

（うあぁ……すごい、お嬢様のっ……！　お、お食事をなさるところ、こんなにっ……）

細い肉管が亀頭をぎゅむっと締め付けて、ウネウネと擦りあげてくる。その刺激がペニスの付け根から背骨を流れ、脳へと伝播した瞬間、頭が沸騰しそうなくらいの快楽が脳神

経を焦げ付かせた。理性もなにもかも吹き飛んでしまうほどの、快感だった。
岩のように強固なエイリアンペニスが可憐な喉肉をぐりぐりとこじ開けていく。
「おごぉぉ……んぐぅぅ！　お、おぇえっ！　――ぐむぅううんっ！」
顎の下が膨れていく。めりめりと、細い喉を膨張させていく肉凶器に、綾の瞳孔が縮んでいく。流れる涙が顎を伝い、雪花のヴァギアに滴り落ちる。
「お嬢様……お嬢様の、お口のなか……とっても狭くて、気持ちいいです……っ」
眉根を蕩かして、艶っぽい笑みを浮かべる、雪花の顔はもはや護り手のそれではない。
「ングゥ～～～～～っっ！　おんぐぅぅっ、んっ、えぉ……ングッ！」
様々な体液で穢れきった綾の黒髪が、雪花の太股に散華する。
口腔を貫く肉槍に、容赦なく頭を押しつけられて、喉奥までを穿られ、引き裂かれたスクール水着から伸びる細い四肢はびくんびくんと痙攣を続けている。
「はぁっ……はぁあっ……お嬢さまっ……こんな、こんなのぉ……っ！」
狭苦しい喉管がキュウキュウ肉を締め付けてくる。プリンと柔らかな唇が、鞘をヌメヌメと撫で上げていく。きつくて柔くてああなんだかもう、気が狂いそうな快感だ。
もとよりその器官は、女である雪花に存在しないものだった。つまるところ、ありとあらゆる感覚が――肉根が空気に触れるというその段階からして、初めてなのだ。
オナニーすらしたことのない初々しいペニスに、小さな歯が突き立てられる。せめてもの抵抗であるかのようなその硬質な感触が、締め付けの快楽に新たなアクセントを加えて

くれる。溜まりに溜まった温かな涎が、ペニスにヌルヌルと絡みつくのもまた心地よい。
幼い少女相手のイラマチオが。初めての性行為など。ああ、もう、耐えられぬ――！
「たっ……たまらないっ！　お嬢様っ……ああっ、申し訳ありませんっ……！」
気づいたときには包み込んだ綾の頭蓋を強烈に振りたくっていた。
ずぶずぶずぶ！　ずぶぶっ！　ずぶずぶ、ぐりゅう！
「ンゴォッ⁉　んぐぐっ、ぐ！　じゅぶっ、ぐじゅぶ！　んふォオ～～～っっ！」
ぐりぐりっ！　ぐりゅる！　ぐりりっ！　狭隘な食道を男根が抉りあげる。脆弱な粘膜を擦られ、削られ、そのたびに綾の眼球が上を向く。
「ああっ、き、きもちぃいっ！　お嬢様ののど、きもちぃいいっ！」
頭の中がチカチカする。出して入れて出して入れて出して入れて出して入れて。綾の喉でペニスをしごきあげるたびに、喉の膨らみがぼごりぼごりと前後に動く。
「ふぐぐっ！　んぐぐっ！　ごぶるっ、ぶじゅるっ！　ぶぅぅ～～～っっ！」
可愛らしかった綾の面相は涙と鼻水と涎とでぐちゃぐちゃだ。赤く染まった額にはびっしりと玉の汗を浮かべて、四肢がばたばたと暴れ回っている。
（やめないと、やめないとっ……！　壊してしまう、お嬢様の口を、壊してしまう！）
頭の中で、くノ一としての自分ががなりたてている。やめろ、やめろと。護ると誓った存在に、何をしているのかと。けれど。いや、だからこそ――
「お嬢様、どうですか……？　この、おちんちんの味は……んっ、ふぁあっ……！」

手の内に小鳥のような少女がいる。護るべき――少女が。
「じゅる！　ぐじゅっ！　んぐぐっ、あげぇ……せっ、せっ……ングゥウン！」
それを好き放題にいたぶっている。頭蓋を押し潰し、顔面を穿って、喉肉を削って。
なんと背徳的なことか。なんと嗜虐的なことか。ああ――。
（気持ち、ィイ――）
朱色に輝く忍装束を欲望の汗色に染め上げて、雪花の表情は恍惚ととろけていた。
ペニスが凝っと硬くなった。何かが、じわじわとその中に満ちていく。それは熱く煮えたぎる欲望の集合体だ。腹の中でエイリアンの赤子が、歓喜していた。
――精通である。
ぐぼぐぼっ！　ごぼっ！　じゅっぽじゅっぽ！　じゅぽっ！
「んぐぶぅ！　んごぉっ！　じゅるぶぐちゅるっ！　ごほっ、げほごっ……ごぼぉ！」
駄々をこねる子供のように、膝から先がばたばたと上下して、くねる子尻は燃ゆるように赤らむ。青い肉体を包む藍色のスク水は汗でヌメり輝き、稚魚のようであった。
「お嬢様っ、お嬢様っ！　出ます、でますっ……出てしまいますっ……！」
孕み腹を揺らし、乳汁の染みる豊満メロンを揺らし、雪花も切なげに腰をくねらせる。
肛門がびくびくと震える。括約筋が引きつっている。
ぎゅぅう！　と頭を押さえつけた。思い切り。力加減もせずに。
「～～～～～ングゥゥ！　がっ、がぼぉぉぉ！」

亀頭が何かをこじ開けて、広々とした空洞へ出たのを確かに感じた。
綾の喉の膨らみは胸部を深々と断ち割って、胴体の半ばまで達していた――。
「出る、出る出る！　お嬢様のお腹のなかにっ……ちょくせつっ……う、ぅううっ！」
呻き、歯を食いしばる雪花の身体がぶるりと震え。そして。
どびゅるぅ！　びゅるるるるるっ！　どびゅるるるっ、どびゅるぅうぅぅ！
「んぐぅうぅぅぅ、ごぉぉ、ごぶぅぅぅっ！　おぐぼ、うぶぶぅうう～～～っっ！」
胃の中に怒濤の灼熱汁をぶちまけられて、綾の小尻がガクガク揺れる。
ネットリと粘ついたものが射精管を流れていく。それは凄まじい快楽を連れてきた。
どく、どくどくっ、どくんっ！　吐精は止まらない。腰を震わせ、幼子の喉肉をぐりぐり擦りあげて、射精しながらなおのこと雪花のペニスは幼子の口腔を貪り続ける。
「きっ、きもひぃぃっ！　せーえきっ、せーえきでるのっ、い、イィイイっ！」
頭の中が真っ白になる。小水を排泄する快感を何百倍にも煮詰めたような爆発的な悦楽に眼球が上向いて涎がしぶき、頬がどろりと溶けた。五臓六腑を燃やし尽くすような射精感に、壊れそうなくらい腰が暴れ潰れた尻たぶが真っ赤に染まる。
「あぶぅぅ、ぶぅぅぅ！　うぇ、んぐぅっ！」
小さな身体に穢れきった肉汁を流し込まれ、頭蓋はいつまでも押さえつけられたまま、少女はただアウアウと呻くしかない。折れそうな程にか細い両手足、その指先がビクビクと震えている。両脚が拡がって、そこからじゅんわり甘い小便が広がっていく。

「で、でたぁ……はぁあ……お、じょうさまの、おなかにぃ……」
ビクビク震える男根を、ずるずると引き抜いていく。先端からはなおどぶどぶと、精液の残滓が染み出している。喉チンコのあたりに精汁を撒き散らせば綾がごほっと咳き込んで、すると鼻腔から白く濁った鼻汁が飛び出した。頬も歯も歯茎も子種でじゅくじゅくにして、ようやくペニスの全てが口中より引き抜かれ――
「んぐっ……うぐぐっ！　ごぽっ、ごぽげぽっ！　んぐぶっ！」
激しく咳き込む綾の小鼻に、精液の鼻提灯が膨らんでいた。
「んぐっ、んんっ……おなか、あつくて……いっぱいだよぉ、せっか……」
トロンとした瞳で、少女は下腹に手を添える。はふぅと吐き出す息は生臭く、その唇から濡れた舌が這い出して、精液のついた口の周りをぺろぺろ舐めはじめた。
「う、ぁあ、お、お嬢様っ……！」
あまりにイヤらしく、艶めかしい姿だった。口腔を、責めたてられて幼子は、その被虐すら受け入れてしまっているのだ。
「ふふ……雪花のこれ、まだまだおおきいね……こんなの、はいるのかなぁ？」
などと言いながら、男根の上に少女が立つ。雪花に落ちる、綾の影。
見上げる瞳に映るのは、唇の両端を吊り上げて、淫らに嗤う綾の変わり果てた面相だ。
だらりと垂れ下がるスク水の股布を捲りあげて、少女は己のヴァギナをくぱぁ……と開いた。いくどもいくども穿られ、伸ばされまくった肉唇は、左右に開かれてその内肉を覗

かせている。ツヤツヤしていて、プルプルしている、赤い襞肉の集合体。その真ん中の肉孔は、物欲しげな涎を垂らす口を開いたまま、きゅぽきゅぽと喘いでいた。
「せっか、せっかぁ……これ、欲しいよ、入れたいよ……いいよね、ねえ？」
くちゅり……っと。そのあわいに、雪花の先端があてがわれる。小柄な身体が浅ましく腰を揺らし、目下の肉を埋め込みたいと喉を鳴らしている。
「あ、ああ……ダメです、ダメですよぉ、お嬢様っ……！」
制止の声は掠れるようで、力が籠もっていなかった。こみ上げる期待感に尻の孔がキュムっと窄まり、乳神経が開いてじゅわじゅわっとミルクを染み出させた。
——ああ、挿入れたい。
挿入れて、押し込んで、掻き混ぜて、どぴゅどぴゅ射精したい。口があんなに気持ちよかったのだから、さらに小さな肉孔は、どれほどの快楽をもたらしてくれるのか。
「ねえ、いいでしょう、せっかぁ……？　ほら、ほらほらっ！」
綾の手が雪花の乳房に伸びる。その小さな指が乳頭を摘んで、ぎゅぅうっと引っ張り上げてきた。引き伸ばされる乳タンクからびゅばびゅばと、白濁汁が噴きだす。
「ふぁあ、んぁあっ！　でひゅっ、おっぱいぃっ……ふひぃいっでるぅぅ！」
カクンッと雪花の喉が反り上がった。ぶるんっと、摘まれたままの肉玉が跳ねて、さらに大量の白汁を噴出する。そのたびに脳神経を痺れさせる、射乳の悦楽に、雪花の頬が力なく垂れた。綾の唇が、右の乳房に吸い付いた。頬がきゅうっと窄まって。

じゅるるるっ！　じゅるぅぅぅぅ、ちゅるるるるうるる～～～～！
「はひっ、はひひっ！　りゃ、りゃめでふっ、乳首イクっ！　おっぱぃ、おっぱいで……んぐひぃ、ぃ……イクっ……はふっ、ふぅぅぅぅ！」
雪花の全身が小刻みに震えて美貌がどろりと融解する。授乳の快感に絶頂を叩き込まれ、淫乱ボディがかぁっと白熱して、全身にじゅわりと汗が噴きだした。
「コクっ……コクコクっ……。んっ……これも、おいしいけど……」
喉を鳴らし、乳ミルクを嚥下して、艶冶と微笑む綾の瞳には熱く滾っている。
「さっきの、ここから出たののほうが、もっと美味しかったかなぁ？」
少女が腰をうねらせると、あてがわれた亀頭先端が花肉を掻き分けた。ぬちゅり、くちゅりと粘ついた糸が、先っぽに絡みつく。それはひどく淫靡な腰つきであった。上体と骨盤が分離しているかのような艶めかしいダンスが、敏感な亀頭肉を愛撫する。
「ねえ……入れるよ、入れるよ？　いいよね、雪花……せっかぁ……」
熱い、熱い。熱い肉にヌメヌメクチュクチュ先っぽを撫でられ続けている。
（うぁあっ……せつないっ……こんなの、こんなのっ……せつないぃ……！）
滲み出す我慢汁が綾の愛液と混ざり合い、ペニスを伝い落ちていく。
挿入れろ。挿入れろ。
挿入れろ。挿入れろ。挿入れろ。挿入れろ――！
「あ……あああ、あ……だ、ダメだ、ダメっ……だめ――――――」

――なのに、綾の腰に伸びていくこの腕はなんだ。腰骨に手をかけて、引きずり下ろそうとするこの行動はなんだ。

「あ……せっかぁ……」

ぐちゅる……ずぶる、ずぶりっ！　ヌメリを帯びた幼い肉孔が、亀頭の太さに拡げられていく。ぶるるっと小柄な肢体が震える。恥毛の一本もないすべすべとした陰肉が、少しずつ、強大な肉槍を呑み込んでいく――。

「う、あ、ああ……はいるっ……這入っていくっ……お嬢様のなかにっ……！」

狭いにもほどがある、ちっちゃな肉壺の感触に、瞳の裏がバチバチ爆ぜた。

ミリミリと軋むとば口を無理矢理にこじ開けながら、グロテスクな肉杭が華奢な幼子の股座に潜り込んでいく。進むほどに綾の両脚が左右に拡がった。はぁはぁと、苦しげな息を吐き出しながら、それでも少女は腰をくねらせもっともっととおねだりしている。

「ふぁあ……おっきぃよぉっ……せっかのおちんちんっ……！」

狭苦しい肉道がぐりぐり拡げられていく。ぎりぎりと、男根を締め付ける圧迫感に、雪花の口からもたまらない呻き声が漏れた。

「これがっ……これが、お嬢さまのオマンコっ……！　熱い、熱い……！　うあぁあっ」

女の味など知り得ない雪花の、童貞喪失である。

燃えるようなその温度が脳を焦がす。幼子の胎内はこれほどに熱い。

ぐりゅ、ぐじゅると掘り進む巨大な男根によって、綾の恥丘がぽこりと膨らんでいた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
**株式会社キルタイムコミュニケーション**
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

**http://ktcom.jp/**

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

# あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!
キルタイムのアダルトコミック誌!
業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!
二次元ドリームマガジン
偶数月
17日発売
魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!
コミックアンリアル
奇数月
12日発売
フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!
コミックプリズム
2・6・10月
下旬発売
KTCといえば闘うヒロインアンソロ!
メガミクライシス
澄らに堕ちまくるアンソロジー!
奇数月
中旬発売
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて!
キルタイム
検索
Click
電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

## http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!